



自立と依存

校長 西尾琢郎

職員玄関の梅も満開となり、いよいよ春が近づいていることを感じます。同時に花粉が舞う気配も濃厚に感じられるようになり、嬉しさと不安が同居している心境です。皆さまいかがおすごでしょうか。今年度、新橋小学校に着任し、早いもので1年が過ぎようとしています。この間、感染症対策と学校教育活動の両立や、その他さまざまな新しい教育課題に力を注いで参りましたが、私があればこれと頭を悩ますよりも、日々の先生たちの頑張りや、何よりも子どもたちが元気に、前向きに、日々の学習や活動に取り組む姿が、そうした課題への一番の答えなのだと再認識する1年間となりました。

先日は久しぶりに対面という形で東京都内にて開催された教育関係のセミナーイベントに参加してまいりました。そのテーマは「自立した学びの実現」です。子どもたちを、いかにして「自ら進んで学ぶ人」へと育てていくかということです。この「自立」ということについて、セミナーでは「教師や親の指導や援助に頼らず、自分の力で課題を設定し、解決に取り組み、成果や結果を生み出すこと」と説明されていました。これは非常に高い目標だと思います。

ただその一方、私は「自立とは、依存できる先を増やすことだ」という、東京大学先端科学技術研究センターの熊谷晋一郎先生の言葉を思い浮かべていました。熊谷先生は、新生児仮死という命の危機を経て、その後遺症から脳性まひとなりました。しかし車いす生活を続けながら医学部を卒業、医師免許を取得して、現在の職に就いた方です。熊谷先生はこう言っています。

「一般に、自立の反対語が依存だと考えられています。しかし、人間は障がいの有無に関係なく、一人では生きていきません。どんな人でも、他の人や物など、さまざまなものに支えられて生きているのです」

熊谷先生は、東日本大震災のとき、建物の5階にあった自分の研究室から逃げることができなかったといいます。それは地震のため、エレベーターが止まってしまったからです。逃げる際に「依存する」ことのできる術が、エレベーターしかなかったことを、その時痛感したのだそうです。他の人なら、階段やはしごなどいくつもの「依存先」があるのに、自分にはそれが一つしかなかった、と熊谷先生。

「障害者はいろいろなものに頼らないと生きていけない人だと勘違いされていますが、実は逆で、健常者はたくさんものものに依存できるのに、障害者は限られたものにしか依存できないということなのです。依存先を増やして、一つひとつの依存度合いを小さくすると、まるで何にも依存してないかのように錯覚できます。実はたくさんものものに依存しているのに、『自分は何にも依存していない』と感じられる状態が、「自立」といわれているのではないのでしょうか」

熊谷先生の、そんな言葉を思い出し、私は改めて「自立した学び」について考えていました。子どもたちが「自立した学び」に取り組めるようになるためにも、より多くの、そして自分に合った依存先を増やしていくことが大切なのではないかと。子どもたちの「1人1台端末」も、実はそんな依存先の一つです。先生との授業、おうちの人に手伝っていただいたり、励ましていただいたりしながらの家庭学習、友だちとの学び合いや、塾・習い事での学びに加えて、ネット空間の膨大な情報や、ICTによる読み書き支援の術などを学びの糧としていくことも、これからの子どもたちの「自立」にとって、重要な一つの選択肢になるでしょう。

選択肢が増えれば、一つひとつの依存先への依存度合いが下がることは、熊谷先生の言うとおりで。そんな中で、従来学校での学びの基本スタイルとなってきた、紙の本やノートを前提にした読み書きの重要性もまた小さくなっていくことは確かです。そのことに不安を感じられる保護者の方もおられることと思います。ですが、敢えて申し上げますそれは時代の必然です。すでに科学的な見地から指摘されているように、子どもたちの中には（そして私たちの中にも）必ず一定程度、読み書きに困難を抱える子がいます。それは根性論で克服できるようなものではなく、感覚や認知の仕組みの「個性」であることも分かってきました。そうした子に対して、過剰に読み書きの反復ばかりを強ければ、学び自体への忌避感を生み出してしまいます。子どもの数だけ学び方はあり、道具や手段など、適した「依存先」があることを、私たちは認めていかななくてはなりません。読み書きではなく ICT、ということではなく、子どもたちがさまざまな体験の中で自分に適したものを選び取っていく、その過程こそが自立した学びにつながっていくのではないのでしょうか。その意味で、これまで読み書きに注いできた努力の一部をキーボードの入力や、ネットから適切な情報を探し出すといったスキルのためにも割いていくことに、ご理解をいただきたいと思えます。

やがて来る春が、皆さまや子どもたちにとって、より多くの希望に満ちた季節になりますようお願いしております。本年度もありがとうございました！